

あそ 7

2007



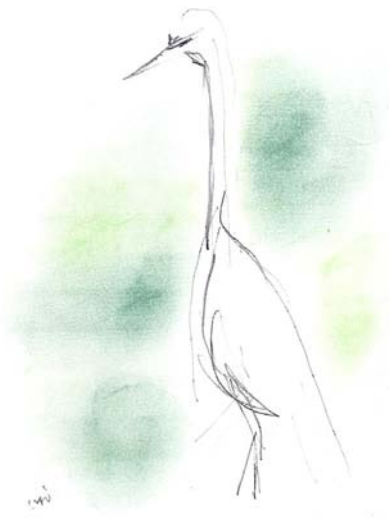
正平鐵筆



魚目照華
山田正平

あそ

七 月



冷さうめん

細魚からうすき烟が見てをりぬ
ゆく春も綱のうへなり傘をさし
九条や靡かぬものに冷さうめん
われわれは進化の途中赦し給へ
ひとりづつ雨傘水母見下ろせる

東京 佐藤喜孝

一瞬の縞蛇の縞目に残る
妖怪はここには棲めぬ麦畑
父の脚叩きしことを走り梅雨
川と化す山の夕立泣き出す子
躊躇せず薔薇の花切る走り梅雨

東京 森 理和

さくら

東京 吉弘恭子

鴟尾に触るさくらのうへの櫻かな
逆睫さくら咲く木の下でかな
極枝はうえからしづくをうけし春の草
あぢさゐの株をかぞへて日送る
沖へ風し巻まく波の裏側おもて側

石 仏

埼玉 渡邊友七

石仏の慈顔蝶よぶ眼をほそめ
つと逃げて葉隠れに鳴く雀の子
郭公や林檎は小さき実を結ぶ
万緑へ草矢放てば昏るるなり
ほととぎす先づ鋏鎌に夜の白む

新緑に朱き点滅救急車
左手はいつも不器用鉄線花
大太鼓小太鼓続く雷の夜
芍薬の噴上るごと開初む
スメタナのうねり見つめる夏燈

東京 赤座典子

蚕豆を甘辛に煮る母もせし
のれそれは穴子の幼魚走り梅雨
蜜蜂の銀座をとべり夏きたる
うぐひすやベンバダにももの干してゐる
家に中二階も下も梅雨さ中

東京 安部里子

東京 遠藤 実

自販機に入らぬラムネ意固地なり
円周率ゆたかに夏の 大樹かな
ジャズ散乱作る夜食は冷さうめん
えごの花親子の距離の曖昧に
饒舌も土用鰻の味のうち

老鶯の声流暢に枝わたる
荒屋敷どくだみの花咲くばかり
バスの中大阪弁の暑さかな
薔薇園に宮様の薔薇囲みあり
アルバムの黴に私の匂ひして

神奈川

鎌倉喜久恵

神奈川

木村茂登子

天地に生氣のみちてみどりの日
真鯉一つ足して今年の鯉のぼり
木洩れ日や歩きはじめた白い靴
氏神も三社も夏のまつりかな
タンポポの綿毛名残もみせず失せ

陸奥は含み笑ひの四月かな
春耕や猶際立てり畔の青
筍飯二つ結びに樹木園
あるがまま毛虫も笑ふ樹木園
重なりて緑濃くなり若楓

東京

斉藤裕子

燕

ただ待ちぬ雨の燕の巢の雁首
筋肉も脂肪もなくて水馬
木洩れ日の中を白蛾の群れ昇る
湧くやうに降るやうに舞ふ真昼の蛾
毒なくも毒蛾と呼ばれ白日夢

東京 篠田純子

池の辺の藤の花房五寸ほど
母の日やわが身惜みてチョコレート
沼五月威厳保ちし太き鯉
飯桐の花の敷き積む青葉闇
夏初め猫の首輪を新しく

東京 芝 尚子

塩 原

東京 芝宮須磨子

夏鶯宿の窓辺に椅子を寄せ
滝の音平家の縁語りをり
透かしみる水面にうつる青もみぢ
若葉風小さきケルン祈りあり
たんぽぽの絮吹く不透明な世へ

たこ焼屋おばちゃんの鬱啄木忌
お住持やいまもふどしで鳥雲に
仏具屋がぶつちやう面で花曇
夕蛙もつと遠くに夕蛙
ひよどりのこの頃の声夏近し

石川 定梶じよう

聖 五 月

この宇宙そらのひとりとなりし聖五月
みどりごに優しく咲けり五月風
夏浅し初めましてはガラス越し
母眠れ子も眠らせよ山法師
聖五月小さき手見つつ戦あるな

埼玉 須賀敏子

同郷と聞きて弾めり桜狩
安房の国入日はいつも菜の花に
息災の杖が友なり青葉風
孫の味知らずに過ごす水仙花
ばらの花ハーブ一滴紅茶に入れ

東京 鈴木多枝子

森

暁闇に生れし白蛾のかず知れず
土塁積む辺りちひさき蛇莓
やはらかな産毛をまとひ櫛若葉
いひぎりの雄花を踏めば匂ひ立つ
あをぞらに溶け入りて消ゆ白蛾なれ

埼玉 竹内弘子

大蛇松

新茶汲む傘さしてきし客人に
深川の人情いまも花菜漬
武蔵野の夏をいくたび大蛇松
白蛾飛び武蔵鏡の葉の大き
今朝羽化の白蛾飛び交ひ森暗く

東京 田中藤穂

一輪の二人静の光かな
毒なくて毒蛾てふ名を夏の雲
病葉の中より紅を拾ひけり
梅の花白金長者館址
石塊に躓かぬやう閻魔虫

東京 東 亜 未

昭和の日

茅花吸ふ面子お手玉昭和の日
葱坊主英才教育全寮制
夏立てり竿竹売の一番乗り
三河路のむらさきの花業平忌
花水木幼子の笑み見とれゐる

三重 長崎 桂子

五 月

埼玉 早崎泰江

巣づくりの場所定まりぬつばくらめ
かはほりの音なく飛べり夕あかり
昼顔の門扉にからむ小さき墓地
水槽の広々とせり金魚老ゆ
モネを観て五月終はるをよしとせり

袂

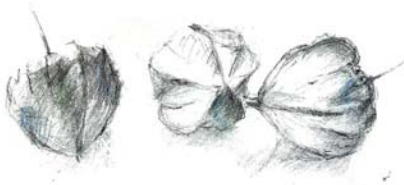
東京 堀内一郎

先生と遂に呼ばれて茄子の花
父の日のうな重と言ふ脆さかな
消えてゆく日々紫陽花に囲まれる
あぢさゐを袂に入れて死するべく
海の日の海さんずいに母と書く

母の日

母の日に凶らず賜ふ赤き花
千の風託す母の日白き花
実梅もぎ見上ぐる足のおぼつかな
師の庭の実梅取り日を懐かしむ
憂き事も五月の風に乗せてやる

東京 森山のりこ



漢訳蕪村

(夏の句)

王 岩

傍山小舟動 劃行新葉中

山に添うて小舟漕行く若葉かな

盛典祇園会 薰風真葛原

祇園会や真葛が原の風かをる

痴々單恋度日難 鎌倉武士持白扇

恋ひわたる鎌倉武士のあふぎ哉

浴湯遮幕香包挂 薰風拂君玉體酥

かけ香や幕湯の君に風さはる

唾女懷香包 楚々已成年

かけ香や唾の娘の成長ひびきたる

對月君在岸上立 撤網江中水生煙

月に対す君に唐網とあみの水煙り

雨後月下誰先来 舉火捕魚雙脛白

雨後の月誰そや夜ぶりの脛白き

人句

さざんかを夜もこぼせる遊びせむ

佐藤喜孝

桜湯の喉越しやさし夕茜

森山のりこ

狼はいつも悪役黄砂降る

森理和

大国主神から卑弥呼に届く早苗かな

吉弘恭子

ネクタイを引抜き春愁掌中に

渡邊友七

囀の途切れるあたり投票所

赤座典子

つつじ山火の玉のごと西日受け

安部里子

夕刊のなかなか来ない春の闇

鎌倉喜久恵

花冷や渡る廊下の黒光り

木村茂登子

被災地のシートの青し花筵

斉藤裕子

不似合な薔薇を貰ひて退職す

篠田純子



前月作品

母の日の花束妻を素直にす	はじめから牡丹の蕾数へ出す	雪解光古刹の笥あふれゐる	大方丈三方開放若葉かな	新しき靴履いてきし花の客	別々に来て旧知めく田芹摘	砂浜をあるく鳥ゐるおぼる月	久能山千百段に花ふぶき	行く限りかたへ薄暑の塀つづく	櫻咲き愛といふ子の教職に	ひやひやと頬に寄りくる桜東風
堀内一郎	早崎泰江	長崎桂子	東 亜 未	田中藤穂	竹内弘子	鈴木多枝子	須賀敏子	定梶じょう	芝宮須磨子	芝 尚 子

喜孝 抄



六月作品より

竹内弘子・佐藤喜孝

おにぎりのまんまなかのおかあさん 佐藤喜孝

あのねママ

ボクどうして生まれてきたのか知ってる？

ボクね ママにあいたくて

うまれてきたんだよ

1982年、当時三歳だった田中大輔くんが話しかけてきた言葉を、母親が書きとめたものです（川崎洋編『子どもの詩』〈花神社〉収録。）

『ママ』というこの詩を読むたびに胸があつくなる。掲句は季語がないこともあって、この『ママ』に似た愛と真理に満ちた一行の詩のようです。

佐保姫の北国に着く便りかな

森山のりこ

平城京の東の佐保山が方角を四季に配すると春に当たることから、春の便りがようやく北の国に届いたことを

典雅に表現された。

狼はいつも悪役黄砂降る

森 理和

「狼」は、かつては北半球に広く分布していたが、西ヨーロッパ、中国の大部分、日本では絶滅したといわれる。「狼少年」「送り狼」など「悪役」にその名を残すだけになった代わりに、中国大陸の黄い砂塵が空を覆い、日本にやってくる。いまや「狼」に匹敵する「悪役」だというのである。

とぶ蝶を眼で追ひ乳房はなさぬ子

渡邊友七

作者の回想の風景かもしれない。野良仕事中的のようにみえる。乳房をくわえたまま「蝶を眼で追」っているなぞ、あまり小さな子ではなさそう。ずっと以前、電車の中で泣きやまない児に前をあけて授乳をはじめたひとを見たことがある。

赤児は泣きやむし母親も落ち着いて、よかったよかつ

たという感じだった。

ああ言へばかう言ふ子にも嫁菜和

鎌倉喜久恵

「嫁菜」は秋に紫色の小花を咲かせる。「野菊」の若菜である。田圃のへりなどに多く生える。茹でるとほんのり菊の香がする。「あゝ言へばかう言ふ子」に食べさせるのは勿体ない気がする。

被災地のシートの青し花筵

斉藤裕子

地震や突風などの災害で、応急措置に使われる青い「シート」。防水性があり軽くて扱いやすい。同じものが「花筵」に使われていることに眼をとめた。入手しやすい物なのだろう。

不似合いな薔薇を貰ひて退職す

篠田純子

「薔薇」の似合う人と似合わない人がいると考えたことはないが、職場は人間関係そのものだと思うので、送別会の花束一つにも微妙な心遣いが働くのでしょうか。

てのひらが擦つたくてこんぺいとう

定梶じょう

金平糖。ポルトガル語だそうです。手が楽しいと書いて「擦った」のですね。あまり使ったことがないので本字を知りませんでした。

母の日の花束妻を素直にす

堀内一郎

日光を通りすぎたる梅雨の蝶

「素直にす」がいいですね。よく考えると言い分はいろいろあつて、そんな簡単なものではないと思うのは、当方が「花束」を貰ったことがないからだと思えます。羨ましい。

次句、「日光」を通りすぎたのだから、もつと先へゆくのでしよう。江戸時代から温泉の番付というのがあつて、那須温泉は東の横綱だったということです。

大國主神から卑弥呼に届く早苗かな

吉弘恭子

何とも大振りな句である。句意などどうでもいと思える豊かな発想である。稲作は約三五〇〇年前から行われていたそうだ。大切な稲のやりとりがあつたかも知れないが、句の鑑賞とは別な話。(この句のみ喜孝)

目黒自然教育園

木村茂登子

鉄の門開き緑陰に誘はる
五月晴白蛾舞ふ日に遭遇す
緑陰に人待つらしき思案顔
夏木立肩車の兒にも遠い空
大真鯉亀も目高も呼べば来る

水鳥の一羽つきりの五月晴

森深き泉にあやめ杜若

初夏の森に木霊の声みちて

悪しきものもその懐に初夏の森

緑陰や久方振りの手辨当

わが森のごとくに憩ふ大緑陰

緑陰を出でて舗道の照り近し

『しむ』のこと (前回に続き)

定梶 じょう

「怠けしむ」に違和感を持った友人は、特別、古文に通じていらっしやるわけではありません。六〇年以上俳句を作ってきて、いつの間にか文語に詳しくなっていた、という処でしょうか。

さて、片山由美子さんの文語文法論のことです。

「以前『水の澄めりけり』という句がしばしば出てくる結社誌を見たとき」違和感をもった、とおっしゃっている。『けり』を使いたい場合は『澄みにけり』とするのが自然。『澄めりけり』の『けり』がはみ出しているような印象を与えるのは、文法に則っていないから」。

よく分らぬ論法です。前回同様、辞書の用例にあたってみると、「ひそかに心知れる人といへける歌」〈土佐日記〉があります。あるいは〈伊勢物語〉に

「狩はねむごろにもせで酒を飲みつつやまと歌にかかれりけり」もある。さらに「とかくなほしけれどつひにまはらでいたずらに(水車は)たてりけり」〈徒然草〉。「りけり」に違和感をもたれるわけですから、「てけり」や「ずけり」の使用例が古文の中に少なからずあるのを、片山さんはどう説明なさるのでしょう。

ことばは廃れ、あるいは変化します。現代「りけり」が全く廃れてしまった故で違和感をもたれるのでしょうか。

背戸畑の芋名月となれりけり

木下夕爾

神の留守ポスト真赤く立てりけり

藤岡築郎

すべなさの身は烏賊船に明けてけり

林原柔井

再び、さて。『日本語を知らない俳人たち』(池田

俊二著」という御本について言及なさっている。「この本で指摘されている文法や仮名遣いの誤りは、概ねその通りである」ともおっしゃっている。その著書を読んでいませんが、片山さんの文章から推測すると、平安時代の文法、かな遣いを唯一の規範として述べている御本にまずまちがいないと思われる。平安時代の文法、とはいわゆる学校文法と通常言われているもの。

「仮名」が発明され、上流の人々の間で、日本語を表現されることが一般的になり、それが現代の私達のことばに繋がってくる。「平安時代の文法」を規範として教育の場に据えるのは当然のことです。

しかしながら、現代私達が句作の時、文語の規則にのっとっている心算でありまして、当然のことながら後代のことばの影響をまぬがれ得ません。

永久とほに生きたし女の声と蟬の音と 草田男
掲句の「たし」は中世になってつかわれだしたそう

です。平安時代には一般的ではなかった。

ちなみに申しますと、『徒然草』は中世の書ですが、平安のことば遣いに忠実、いわば完璧な擬古文の書として、教材に最も利用されているそうです。その『徒然草』に「たし」がよくつかわれている、時代の影響を免れ得ない例でしょう。

あるいは、「食ぶ」の言い切る形が中世以降「食ぶる」に変化し、現在の「食べる」に繋がってくる。「食ぶるべし」が古語文法の誤りであることに異議は申しませんが、中世近世以降違った使い方も出現してきていることを知るべきです。

平安文法のみを正義とすること大いに結構ですが、そこまで徹底できるものでしょうか。

そういえば片山さんの挙げた句の中に

曼珠沙華わが去りしあと消ゆるべし 野沢節子
がありました。「消ゆるべし」に何人の方が「釈然としないもの」を感じるでしょう。

瀧春一先生の思い出

田中 藤 穂



俳誌『暖流』の主宰であられた瀧春一先生に私が始めてお目にかかったのは、昭和五十四年五月のことであった。その頃谷中の長久院という橘澄男・沙希夫妻のお寺で暖流の支部句会が開かれていた。この句会はもともとは暖流同人の鈴木石夫先生と石夫先生が勤務しておられた学校のPTAのお母様を中心とした小グループで始まった俳句の会でしたが、沙希さんの女学校の友達その他徐々に人数も増え、そこに主宰の瀧先生、秋山珠樹先生や、ベテランの会員の方達も見えるようになり、月一度の句会が開かれておりました。私は始め句会へ参加するためでなく、女学校のお友達の方達に用があつて伺つたのですが、句座の末席に連なつてはじめて作つて出した句を石夫先生がとつて下さり、半分は旧友に会う楽しさ、半分は俳句のおもしろさにひかれて、月一度伺うようになったのです。

二、三度伺ううちに、私は瀧先生の魅力にとりつかれてしまいました。そのとき先生は七十九才でいらっしやいま

した。

谷中句会は、ご住職の澄男さんも「ここはサロンです」とよく仰しゃつていましたが、境内も広く四季の花も多く、また日暮里駅からの道の途中には谷中の墓地もあり、また土地柄か、お世話係の夕子さん昌子さんなどはじめ皆さんがざつくばらんで親しみやすい方々でとてもよい雰囲気でした。

瀧先生はとても谷中がお好きでした。それは先生が三越を退職されて、演劇の衣装を作る会社にいらした時、谷中の長久院に程近い加納院というお寺の部屋を借りて仕事を続けた時期があつたのだそうです。納期に迫られて夜なべになつたりする時、お針子さん達が疲れて眠くなるので、先生は眠気ざましに落語を一席やったり唄を歌つたりして、お針子さん達を元気づけたのだと仰つたことがあります。そんなご苦勞時代の思い出が、深く先生と谷中を結びつけていたのでしょう。

私が暖流谷中句会に正式に入れて頂いたのは昭和五十五年の五月ですので随分遅い弟子入りですが、私が日暮里の生まれ育ちですと申し上げたことから「あの辺は若い頃よく歩いたもんだ」と仰しゃり「田村俊子という作家が好き

でね。日暮里駅のすぐ上に住んでね、あの辺歩いてたら逢えるんじゃないかと思ってね、随分うろうろしたもんだ」ですって。「じゃー先生、今で言えばストーカー」なんて、誰かがさすがに斥咎しても「ヘッヘッ」とお笑いになつておしまい。

先生は父親のような親しみと頼もしさを会う者に与えられ、明るくダンディで人に分けへだてなく偉ぶらず、その類ないお人柄の故にみながら慕われ尊敬されたのだと思います。父親のようと言えば、ある時私が、「昭和二年の生まれです」と申し上げた時、じいーと私の顔を見ていたことがありました。先生には、生まれてすぐ亡くなられた昭和二年生まれのお子様がいりましたのです。もしかすると先生はその子のことを思い出していらしたのかも知れないと、後になって思ったことでした。

瀧先生の俳句は人情味の濃い句が多く、正直で優しく、いつも働く者、下積みの者、弱者に目が向けられています。けれど男性的でさっぱりしている。明治・大正・昭和・平成と生きていらした方だから、私達の知らない面白い話をして下さったりする。また現代のことへの知識欲は旺盛で「クロワッサンて何？パフ（化粧用）って何です

か」などとお尋きになるので、みんなワイワイと先生に説明する。先生は「俳句は自得するもんです」と仰有つて句作のテクニクなどは、滅多に教えて下さらない。でも先生に採つて頂きたくて一生懸命で楽しい句会だった。先生がよいと仰しゃれば良く、悪いと言われれば悪いとみな心から信じていて、先生は大黒柱だった。先生は温かいけれども時折厳しい面も見せられた。それがまた何とも言えない魅力であつたと思います。

谷川季誌子編の瀧春二年譜によれば、先生が俳句をはじめられたのは小学校四、五年生の頃本を購入して独学で俳句をはじめ、号を春一としたとの事、明治の終わり頃のことです。それから九十余年の人生の間に、関東大震災（身内を亡くされる）あり、戦争（日支事変から第二次世界大戦）あり、一家の長としても様々の苦勞を負われました。俳句界では、昭和十五年、十六年と、新興俳句と目される人達が検挙連行され、文学者も文学報国会など戦時体制の中にとりこまれてゆき、俳句の仲間も召集されて戦地へ赴くもの、戦死するもの、戦病死するものと、暗い時代に直面しました。

昭和二十年八月十五日、敗戦。日本は一変する。

その後先生は、「無季俳句容認、十七首基準律」を主張し、師の水原秋櫻子（馬酔木）に容れられず、秋櫻子と袂を分かつ事になる。暖流の会員には多様な人達が居て、形にとられない自由な発想で句作していたのは、この故なのでしょう。その後二十年近くを経て先生は馬酔木に復帰する。この間秋櫻子と春一の心はずつと繋がっていたのです。瀧先生の奥様が亡くなられた時、秋櫻子夫妻は弔問にいらしている。秋櫻子が亡くなる時、一番最後にお見舞いにおとずれて、葡萄をむいて、口に入れてあげたのは春一先生であつた。

谷中の句会で仰有つたことがある。「季語があろうとなかろうと、破調であろうと、良い俳句はよい。山頭火、放哉がその良い例です」「けれども破調や無季で良い俳句はなかなか出来ない」と。ちなみに私の『水瓶座』の中にある「煌々と霜夜の花屋灯を満たす」はじめ私がかつまらぬ上五をつけていたのを「この句は中七下五だけではないね」と仰有られて私はあわてました。瀧先生へ投句の時、上五抜きで出したところ「煌々と」と先生はつけて下さいました。『暖流』の新年大会、全国大会は毎年全国から会員が集まって賑々しく行われ、お世話なさる幹部の方々は

堀内一郎さんはじめ大変だつたと思いますが、私共一般会員は楽しく参加させて頂きました。高点句や先生の選に入つた句には、御褒美に先生の色紙や短冊を、また天賞はお互いに上げたり頂いたり、またその後の親睦会では必ず先生の「月は臙に白魚の……」の三人吉三の名台詞をおねだりして喜んだものでした。

米寿のお祝いの時いただいた「米寿元旦きのふに生れ来し思ひ 春一」の句を紺地に白く染め抜いた暖簾は今も大切にしております。その都度いろいろ思い出がありますけれども、暖流刊行五十周年記念祝賀会の時は、及川貞・金子兜太・草間時彦・澤木欣一・杉山岳陽・千代田葛彦・林翔・文狭夫佐恵・松沢昭・渡辺恭子他俳人二十四名、御家族、暖流会員多数出席しての盛会でございました。

先生がお倒れになられたのは確か九十才になられる寸前で、幹事の方々が卒寿の賀を計画していた最中と記憶しております。

先生はお若い時から何度も大病を乗り越えられたと伺いました。今思うとあの瀧先生の滋味、包容力、頼みしき、みな沢山のご苦勞を乗りこえていらした故のものだったのだと思います。みなさんがそういうことでついて行かれた

のでしよう。

先生の亡くなられた後の『暖流』は中心の大樹を失ってしまったいました。先生にご薫陶を受けた大勢の俳句を愛する弟子達が今も俳句を続けてはおりますが、求心力を失ったことは致し方ないことです。私は俳誌も人間も一代と思いません。今『暖流』はなくなりましたけれども、瀧春一先生が弟子達に残された暖かい流れは今も脈々と一人一人の中に残っていて、先生に出遇うことの出来た幸せを私は今も日々噛みしめております。

瀧先生のこと



竹内弘子

三十五年前、浦和から大宮の住宅団地に引越した翌年、次女の幼稚園入園にともなう送り迎えで知り合ったSさんから、集会所で開かれている俳句の会に誘われた。

句会の指導を下さるK先生が『暖流』の幹部同人でいらしたことから『暖流』への入会を勧められ、昭和51年『暖流』に入会したのだった。

短歌や俳句、詩や小説など、読むのは好きだったけれど

発表するなど考えてもみなかったので、入会したら毎月きめられた数の俳句を投稿し、主宰である瀧春一先生のお目にとまるとご講評が頂けることもはじめて知った。

何もかも初めてで、ただめずらしく面白かった。

まもなく『暖流』の谷中旬会（長久院、橋澄男師）にも入会させて頂き、瀧先生の聲咳に接することができるようになった。

先生は、その頃すでに七十歳の後半でいらしたと思う。おやさしい感じの方だった。

先輩の方が「むかしはきびしかったのよ」「とてもすてきだったわよ」と口々に仰しゃるのは、全くその通りだろうと思った。

中高なかだかで色白の、お背はあまり高くないが、恰幅の良い美丈夫でいらしたと思う。

三越の衣装部に勤務しておられたということでお洒落でもあった。

歌舞伎がお好きで『暖流』の祝賀会するとき、河竹黙阿弥の「白波五人男」の一人「弁天小僧」の声色をされた。会場のざわめきが、ふと鎮まったかと思うと、先生の御席の辺りから、例の「月も朧に白魚の——」のような有名な科白

が聞こえてくるという風だった。みな聞き惚れた。お若かったころは然さこそ思われた。

ご教授を仰いだ年月は長くなかったが、『馬酔木』につらなる『暖流』にご縁があったおかげで、たくさんのお優れた先輩にめぐまれたのも有難いことに思っている。

先生のこの一句



佐藤 喜孝

どくだみを踏めば怒りの香を発す 春 一

〔花石榴〕所収S五十五年)

どくだみを手にするとは一種独特なおいがある。中には好きな人もいるだろうが、大半の人は苦手なおいだ。そのどくだみを干切ったとき発する臭いを怒りのようだと思容する。そう言われればあのおいは怒りそのものだ。そんな気にさせる句である。一義的にはどくだみが怒っているという意だが、不興な作者がわざわざどくだみの叢に寄って行って踏みつけているような感じがする。他にもこ

の句集にはどくだみの句がある。

老人ホーム十葉などもコップに挿し
硝子器に挿すどくだみは高貴な花

老人ホームでは、飾る花もそこらに咲いている十葉の花、と佻びしい風情の象徴となつている。それから三年後、硝子器に挿したどくだみの花の、よく見ると純白の清々しい風情の花に驚いている作者がいる。先生は私の俳句は日記のかわりだ、とよく言う。しかしそれだけではないとおもう。一所に留まることを嫌っていて、いつも昨日と違う作品をと心掛けている。対象もつねに新しいものを句に取り込んでいく。世田谷の砦に住めば、環八、鼠取、歩道橋など句にやすやすと取りこんでしまう。

失意の時、光陰集に投句すれば一人の読者がいる。それを頼りに投句していた。確かに読んだという形跡として、何句か選ばれて活字になる。命の110番という電話があるそうだが、ある時期の私にとって光陰集（『暖流』瀧春一選）はそういう類の働きをしてくれた、と今振り返ってありがたくおもう。（『暖流』1992年8月号より転載）

あをかき集

春の宵
草餅
四

堀内一郎 選 (六人目以降五十音順)

春宵のうすべりにある亀甲紋 定梶じょう

ていねいに祖母は焼きたり蓬餅

水栓の漏れゐて四月始まりぬ

点眼後四月さびしき景の見ゆ

春宵のクレオパトラの鼻のこと

町の銀座春宵流す演歌など

去り際に言葉つまらす春の宵 渡邊友七

春の宵墓来て胸の洞に鳴く

草餅に家中妻の声通る

相寄れる父母の遺影に草餅を

定梶じょう

亀甲紋で和室を感じ安らぎが伝わる。

水栓は活動期への意識意欲に見える。

町の銀座は地方の鄙びた賑わいで懐かしい。クレオパトラの鼻が一步抜けたと思ふ。「の」「三」は「春宵や」としても通じる。

渡邊友七

言葉つまらすに種々想像させる。妻の声で一家の主役になっている様子。明るい一家である。墓狂ひ出すと思ひ切ったが不自然でないのは力量であろう。少年の瞳は素直だがのこる。

森山のりこ

メトロに情感が籠り後を引く別れ。

少年の瞳巨きく四月来る
陽炎に四百の墓狂ひ出す
親子鶴折る手幼し春の宵
春の宵メト口の馱で別れしまま
森山のりこ

騙されて我も欺く四月馬鹿
春宵や備前の壺の火の走り
幸せな母娘で造る蓬餅
草餅の香り変らず峠茶屋
春の宵踵の高い靴を履く
森理和

豆の花丸テーブルに四人掛け
草餅や田舎の道は日向道
草餅や縄縷ふ祖母の掌の動き
勘三郎われも見得切る春の宵
青春の四年忽ち卒業す
芝尚子
四月馬鹿言ひ譯にしてにんまりと

四月馬鹿は一年に一度は許されようが
騙されて欺く世の惨状を思うとこの句重
みを帯びてくる。

森 理和

気分は上々で。「雨上り」に見られる
ように、ものを悪い方にとらない性格で
あろう。俳句を楽しんでいる。草餅は思
い出であり祖母に突き当る。たまたま税
金で勘三郎が墨をつけたが、見得を切る
うちが花。

芝 尚子

花の命は短くて、青春もまた忽ち。
「にんまり」に強かさが隠れている。
豊かな人生経験を物語る。急逝は惜しま
れるが。

赤座典子

急逝を良きと言ふと人春の宵
お茶一服ひとりごころの春の宵
草の餅頬張つてゐるひとりかな
草餅や行きつけの店代替り
春の宵入れ子人形黒目勝ち

赤座典子

濡れそぼつ猫急がずに春の宵
島唄の路上演奏春の宵
すんなりと上首尾は無理草の餅
草餅やまづは四方山話から
春の宵夕刊とりに夫を待つ
春の宵おだやかな今とどめたし
春の宵家まで歩くハミングで
冴返る四角い盆のお汁粉や
春の風四角四面を飛ばしたし
春の宵ふと母の声聞くやうな
春の宵門掃く人に会釈して

安部里子

鎌倉喜久恵

入れ子人形、何れも同じ主張を持つことし。目には目を作者は魂を感じたのであろう。「急がずに」の生き様からは自身の反芻も漂う。「すんなりと」思いにまかせぬのがこの世の倣いのような。

安部里子

「夕刊」にかつけた処が奥ゆかしい愛情表現。ハミングも出る幸せ感は何とも羨ましい。それでも「四角四面」不満もお在りなのか。

鎌倉喜久恵

昔は夕暮れになると、どの家の母親も子供のことを心配したものだ。外には遊ぶ空地など残っていたからだ。私などいつも人攫いに連れていかれると言っていた母の声がまだ耳に残る。

甘味好きの男も居るから蓬餅でお話。

草餅を好物とする男来る
ちぐはぐな会話をつなぐ蓬餅
のら猫に四天王あり恋の春
春宵一刻ビストロの隅占めてをり

木村茂登子

白猫を見しは幻か春の宵
春の宵隣に誰か居るやうな
大笑いさせて下さい四月馬鹿
四の日のお地蔵さんに春に風
シエーカーに8の残像春の宵
それぞれにそれぞれの母蓬餅
ヒットラー嫌いの私の生れし四月廿日
春の宵淋しい方の道折ぶ
親生きてゐるうち不孝蓬餅

篠田純子

横断歩道送られてゐる春の宵
四月生れの孫の二人と草の餅
同窓の真砂女もぬたり花の土手

芝宮須磨子

さて、男もお酒だけではないらしい。

木村茂登子

「春宵一刻」に洋風をぶつけて新味を出したバイオリンの音も聞こえてくる。ウイーンの場末の居酒屋を思い出す。

「四月馬鹿」「お地蔵さん」は気分転換の留意であろう。

篠田純子

「8の残像」は滑り出し良好といえる。今後の変化を楽しみに。ヒットラーと強引だが若さである。「淋しい方」運命では都合の悪い方を選べと諭すが。作者は処世術にも長けているようだ。

芝宮須磨子

このところ地域のいざこざに巻き込まれている。俳句にはよくないことで俳人

四月尽寒いですねと街で会ふ
春宵やあんみつ汁粉神楽坂
草餅や投票立会入見知り顔

須賀敏子

春の宵小さく口笛吹いてみる
いつの間に聞き上手なり草の餅
四才の瞳輝く入園式
穏やかに歳を拾つて四月尽
母に真似指跡のこす蓬餅

鈴木多枝子

蓬餅母子の会話はづみけり
夫の忌に作ると決めし蓬餅
夫逝きし弟も逝き蓬餅
春の宵和鉄に鈴つけてみる
四才の子と見る絵本春の宵

田中藤穂

春宵や本散らかして眠くなる
風呂敷に草餅のあり父を訪ふ
草餅の手作りといふ大きさよ

なんだから、いつも俳句が出来る状態に
しておくべきで雑念がいけないのだ。

町会長を止めるときが来たようだ。

さて、作者平素五句なので上に届かぬ
が決して作品云々ではない。平凡に見え
て安定している。何時も余り語らぬ人が
「同窓の真砂女」には驚いた。長い物語
を含んで興味津々である。よき時代を彷彿
させ思い出の中へ引入れる。

「神楽坂」も学生時代であろう。

須賀敏子

「投票立会人」。私の処も知人であった。
和やかに投票を済ませた。「歳を拾つて」
は授つたと同じ。晩年言うことなしのご
夫婦である。

鈴木多枝子

「指跡のこす」で一句を万全に。母に

副業は俵引です草の餅
春の宵竹藪怪し高台寺
春の宵矢印たどる「ねねの道」
東 亜 未

大皿に草餅京のやはらかさ
跡取りの点前師に似る草の餅
四よつがしち頭茶会に参ず花の京
おだやかに夕暮れの鐘春の宵
長崎桂子

あかね雲やがて灰色春の宵
草餅や味よし形いびつなり
風光る四方流れの多き町
うららかや四海兄弟卓かこむ
久しき友びわ湖に集ふ四月来る
早崎泰江

幼子と探す四つ葉のクローバー
めずらしや若き来客春の宵
つれ立ちて猫と散策春の宵
草餅や土手の匂ひをなつかしむ

感謝、その思いを「夫の忌」と重ねる。
何としても「蓬餅」が亡き人への重要なキーワードになっている。

田中藤穂

「草餅の手作り」人間関係、田園風景
など想像される。風と光が見え「大きき
よ」が素朴さを強調している。「俵引」
に紺の股引衣装など私にすれば、得難い
初期の下町の香りである。

東 亜 未

旅行吟観光作品は難しいとされるが、
読み手に過去の旅の思い出を語らせて呉
れる。有難いことだ。「高台寺」「ねねの
道」も甦ってきた。簡素だが「大皿の草
餅」が目立つ。

長崎桂子

草の餅爪に吉原土手の土
吉弘恭子

婆婆の手で四眠蚕は釜の中

春の宵こゑかけ合うて別れけり

草の餅四方山話明け白む

春の宵ふときこえくる消防車

春の宵立てて置かれし万華鏡

春宵や見知らぬ人と赤信号

さくら咲く四角に水の濁りをり

江戸川に渡し舟あり草の餅
竹内弘子

二人子の遠出を案じゐる四月

ボンゴレに砂の混れる春の宵

ドレミファは一二三四夏は来ぬ
堀内一郎

草の餅ものの弾みで笑ひけり

くつつ下を探してをりぬ春の宵

「春の宵」「夕暮れ」と重なるが素直に読める。「形いびつ」に人生の機微を感じた。「四海兄弟」の団欒はよく座つて佳品。

早崎泰江

友人との出会いを大事に心掛け楽しんでる。「四葉」「若き来客」「猫」と積極さが感じられ、効果を生む。

クローバーの夢探し？が良いようだ。

吉弘恭子

山の手牛込育ちの私には「吉原土手」は魅力であり。「四眠蚕」も私には真新しい。博学さに驚く、春宵の別れ消防車、何が起こるか予期出来ぬこの頃この世。「四方山話」が無事を語り歳月の流れをしみじみと。

欧州 紀行

庄司ひろみ

ドイツとお別れし旧ボヘミアの中心地プラハへ。
プラハは今回で2回目ですが本当に美しい町と思います。しょうがないことですが観光客の多さに少々んざりしてしまいました。猛暑もかさなって思うように見て回れず、後悔をのこしつつプラハをあとにしました。

バルバラ大聖堂





テルチ

次はクトナーホラという町の聖バルバラ大聖堂です。大聖堂の受付のところに日本語のガイドブックがあつたのには驚きました。クトナーホラは本当に小さい街ですが銀鉱で栄え700年前はプラハについてチェコ第二の都市でした。

車は次の世界遺産の街をもとめてテルチへ移動。テルチはイタリアより伝わったルネッサンス様式の影響を受け、「モラヴィアの真珠」とも呼ばれ印象的な風景を作り出しています。

中央ヨーロッパで最も美しいともいわれるテルチの中心ザハリアーシユ広場。広場の北西つきあたりに位置するテルチ城は、13世紀にゴシック様式で建てられたものを、16世紀中期に当時の城主が北イタリアから招聘したイタリア職人たちにルネッサンス様式へと改築させたものです。

あをキーワード俳句辞典

妹

妹も酒ぐせ悪くクリスマス

金魚玉はなれて寄つて同母妹なし

大正と昭和の姉妹赤まんま

妹のやうな娘と濁酒

妹や生れ故郷は青時雨

癒

かはゆさが心身癒す寝待月

雨音に心癒され立夏かな

虫時雨頭痛なかなか癒えません

風邪癒えてモーツアルトで葱きざむ

物言はぬ人に癒され枇杷の花

岩

岩上の聖堂夏の天を指す

山あぢさゝの瀧の真裏にかわく岩

溶岩の重なる景色やなぎらん

モンゴルの岩塩壺に鳥曇

大岩の葛饅頭に雪解谿

堀内 一郎

竹内 弘子

早崎 泰江

篠田 純子

須賀 敏子

東 亜 未

芝宮須磨子

長崎 桂子

赤座 典子

鈴木多枝子

鎌倉喜久恵

吉弘 恭子

芝 尚子

田中 藤穂

森 理和

あを吟行会のお知らせ

吟行地 所沢航空記念公園

日時 9月30日(日) 午前11時

第二日曜を今月のみ変更しました。

集場所 西武新宿線「航空公園」駅

改札を出たところ(改札は一ヶ所)

会場・句会場 未定

申込締切 9月20日

幹事 須賀敏子 04・2994・5937

ファックス 右に同じ

五月の句会

傳句会 中野区 カフェ傳

懐紙広げ落度なきやう草の餅	夏来る三角点で写されし	亀の子の手足ばらばら泳ぎ着く	陸奥は含み笑ひの四月かな	沖へ風巻く波の裏側おもて側	青風櫂の空のこなごなに	別々に来て旧知めく田芹摘む	新緑に点滅の美し救急車	母の日やわが身をしてみてチョコレート	葉桜や男の料理出来上がる	終点で単線となる涅槃西風	押入のなかの陶枕落ちつかず	紺碧の天の静まり雪崩跡	葉桜や二人で漕げる自転車に	真鯉一つ足して今年の鯉のぼり	青梅街道渡るけはひを油虫
東亜未	夏子	綾子	裕子	恭子	敦子	弘子	典子	尚子	藤穂	喜久恵	木枯	寒林	理和	茂登子	喜孝

調句会 さいたま市岸町公民館

巢つくりの場所定まりぬつばくらめ	暈のへり曲りて失せぬ夜の蟻	あを吟行 目黒自然教育園	天辺に狂ふがごとき毒蛾かな	錦木の緑の花に日のこぼれ	白蛾飛び武蔵鎧の葉の大き	赤檜は森の祖とも昼蛾舞ふ	中世のくらさに散れり夏落葉	緑陰に人待ち顔のあからさま	筍飯二つ結んで吟行会	いぎりの雄花敷き積む木下間	がまずみや白金長者館址	筋肉も脂肪も削げて水馬	七座句会 中野区 小川苑	風知草揺れて綺麗な風を生む	発心の四日保ちたる青蛙	葉桜や昨日は昨日傘を干す	夏初め猫の首輪を新しく	わが恥を傘にかくさむ青山椒	ひとりづつ傘さし岸の水母みる	お菓子屋を傘下にをさめ三社祭	家中の傘干してある五月晴	透明な傘の向うの椎若葉	須磨子	弘子	江	恭子	喜孝	藤穂	敦子	弘子	裕子	尚子	東亜未	純子	寒林	藤穂	理和	尚子	東亜未	喜孝	恭子	夏子
------------------	---------------	--------------	---------------	--------------	--------------	--------------	---------------	---------------	------------	---------------	-------------	-------------	--------------	---------------	-------------	--------------	-------------	---------------	----------------	----------------	--------------	-------------	-----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----

連句勉強会 毎月第1日曜

中野坂上 佐藤喜孝 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜

カフェ傳 森理和 (03-3368-4263)

調句会 毎月第1土曜

岸町公民館 竹内弘子 (0488-86-3501)

あを林檎 八月第3日曜

京橋プラザ 篠田純子 (5250-2776)

七座句会 毎月第4火曜

小川苑 吉弘恭子 (090-9839-3943)

あを吟行会

所沢航空記念公園 (九月)



インターネットに瀧春一全句集を紹介しようという無謀な計画をひとり進めている。六月にやっと『萱』をアップした。『萱』は第一句集なので最初に作りたかったが、手元に句集が無く、また古書を探したが見つからなかった。もちろん『暖流』の先輩にお願いしたがなしのついでであった。大久保にある俳句文学館に二度通ったが、まだ不安なところがある。手元にあるても校正ミスがないか不安なのに、蔵書にないのはつらい。装丁は「菜園」「常念」「瓦礫」等と一線を画すすばらしい仕上がりにあった。いつか手元にと考えている。次は『深林』。この装丁もすばらしい。インターネットで探し手に入れたが、美本というより未読のような雰囲気のある古本であった。拾い読みしていてふと思った。高島茂の句風に似通ったところを感じたのである。良く読みもしないでこんなことを書くのもどうかと思うが、春→↓茂のつながりが見えたような気がしてきた。『深林』を作る楽しみが一つ増えた。今号は田中藤穂さん、竹内弘子さんに瀧先生への思い出の一端を書いて頂いた。私も旧文であるが『暖流』から転載させて頂いた。計算したら十五年前のことと知って改めて時の流れの速さに驚いている。その頃先生はすでに病におかされていた。読んで頂けないと知りつつ先生一人に向けて書いた短文であった。指折り数えれば先生没後十一年である。

前号は発行日が早まって喜んだのもつかの間、今号は遅れてしまった。体調が悪いわけではないのだが順調に事が運ばない月もあるようで残念。蓼科吟行会は無事楽しく終わったが、その間、台風・地震と大きな自然災害が続き多くの人が苦しんでいる。参院選もあるが、少しは政情が動くのだろうか。そんなこ

とで心を曇らすよりはと吟行での夜、CDで飯田龍太の講演を聴いた。心にしみいる俳句へのおもいを入れ歯のような口調で聞いた。聴いても右から左へ抜けてゆくのであと数回聴かなければと言いきかせている。



山田正平印譜の読みが不安で調べた。ネットの「篆刻印學專業網站」に山田正平の印譜が紹介されていた。そこでの読みが、「銚華照魚月」とあった。私にはどうも「目」にしか読めないので一応そのようにしておいた。意も含めて勉強中。後日お知らせできれば幸いである。(喜孝)

◇新会員(篠田純子様ご紹介)

遠藤 実 東京都墨田区向島1-30-4

二〇〇七年七月号

発行日 六月二〇日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹僊房

カット/恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

郵便振替 00130-6-55526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。